

## 智顗の老莊思想理解について

研究員 井上 智裕

中国において佛教は中国固有の思想である老莊などと関連しながら受容されていった。特に初期中国佛教において格義佛教として老莊思想に擬えながら理解された。さらに佛教は老莊思想と関連しながら展開していったのである。隋代の天台大師智顗の教学においても老莊の語句や論理が用いられているのである。しかし先学の研究において智顗は老莊思想に対して批判的であることが指摘されている。そこで智顗の老莊理解について考察を試みたい。

老莊思想について智顗は『摩訶止観』や『維摩經玄疏』などにその見解を示している。まず先学の研究において智顗の老莊思想に対する批判的な見解とされる箇所について見ていく。『摩訶止観』破法遍において佛教と老莊を比較して、佛教を高い・正しいものとし、老莊を低い・邪なものとし、老莊の典籍を邪典と記すなど、老莊に比べ佛教をより優位なものとして述べているのである。さらに続けて理、教相、教主の姿、説法時の様相などの九つの観点から佛教と老莊について論じ、佛教の優位を説くのであり、先学が指摘しているように老莊が批判的に扱われているのである。しかし、ここで智顗は老莊の思想を否定するのではなく、佛教と老莊を同じように理解することを問題としているのである。つまり、老莊と佛教について論じた九つの観点の

いずれにおいても佛教と老莊が「斉しい」とすることを批判しているのである。また智顗は老莊と佛教を同一に論じる比丘を「惡魔の比丘」「師子身内の蟲の法師・禪師」として厳しい言葉を用いて批判しているのである。

さらに『摩訶止観』の諸見境にも老莊に対する記述がある。そこでは老莊の「自然」について、すべてが自ずからそうなるというのであれば果を破することが無く、業を述べないのであるから因が無いとして、因と果の關係を無視する思想と批判するのである。しかし、続く箇所に「虚心」は、貴きにおいて憍ることがなく、窮していても悶えることがない、「自然」は貪りや悲りの心をとめるという長所もあるとされる。つまり、老莊の説く思想も一概に否定されるのではなく、長所も認めているのである。

さらに『維摩經玄疏』において、老子や孔子などの教えも法身菩薩の垂迹によるとし、『清淨法行經』を経証として摩訶迦葉が中国に生まれ老子となることを述べている。またそれら聖人の教えは、衆生の機根や縁に赴いたものであり、四悉檀に基づいているとするのである。

このように智顗は老莊思想を批判するだけではなく、その立場を認め、時にその用語や論理を用い、佛教に取り入れていくのである。しかし佛教は佛教であり、老莊思想と同一視することを厳しく批判するのである。それは歴史的に塵佛との関連もあるが、佛教を誤って理解することにつながるかと考えていたことによるのではないだろうか。